慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	夏目漱石『坊っちやん』における会話と内的モノローグ
Sub Title	Dialogue and internal monologue in Natsume Soseki's first person narrative, Botchan
Author	大野, 晃彦(Ōno, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.305- 344
JaLC DOI	
Abstract	夏目漱石の小説『坊っちやん』のテクストの一つの特徴は、会話の場面での主人公坊っちゃんの相手に対する反応が、発話レベルでは貧弱・粗雑であるのに比して、発話されない内心のレベルでは、その独特の江戸っ子弁に見られるように、きわめて饒舌かつレトリック感覚豊かに表現されていることである。そしてこの後者の点を担っているのがこの小説での内的モノローグによる表現である。 本稿では、この作品の以上のような会話と内的モノローグに見られる事実を、特に沖釣りのエピソード (「五」章) と昇給辞退のエピソード (「八」章) での坊っちゃんと赤シャツの会話について検討し、それを通してこの小説テクストの特質の解明を試みた。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0305

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

夏目漱石『坊っちゃん』における会話と内的モノローグ

大野晃彦

要旨

夏目漱石の小説『坊っちゃん』のテクストの一つの特徴は、会話の場面での主人公坊っちゃんの相手に対する反応が、発話レベルでは貧弱・粗雑であるのに比して、発話されない内心のレベルでは、その独特の江戸っ子弁に見られるように、きわめて饒舌かつレトリック感覚豊かに表現されていることである。そしてこの後者の点を担っているのがこの小説での内的モノローグによる表現である。本稿では、この作品の以上のような会話と内的モノローグに見られる事実を、特に沖釣りのエピソード（「五」章）と昇給辞退のエピソード（「八」章）での坊っちゃんと赤シャツの会話について検討し、それを通してこの小説テクストの特質の解明を試みた。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第五十一号（二〇二〇）三〇五～三四四頁

はじめに

文あるいは文章には、それの表わす事柄が現実の事態・事実かどうかの点で解釈上種々の疑問が生じうる。例えば次の一連の文について見てみよう。「いま私の手許には二冊の本がある。イギリスの歴史家G．バラクラフ教授の「現代史序説」（G. Barraclough. An Introduction to Contemporary History）の英語版原著とその仏訳版である。前者は二年前の冬ハーバード大学前の書店で買った。後者の方はもう十年も前、留学先のパリで求めたものである。この仏訳版をなぜ買ったのかは今ではもう覚えていない。多分、日本で邦訳を全部読まなかったため、見つけた時おのずと手がのびたのであろう。その本を私は以前から興味深く思っていた。しかし英語版の方には今でも鮮明な記憶がある。それはその直前、たまたまボストンの教授宅にお茶によばれ、次いで近郊の寓居にお招きする機会に恵まれたからである。当時、私はハーバード大学言語学科客員研究員で、毎日を米国北東部の雪の中で過ごしていたのだった。」この文章が実際の出来事について語ったものであるか否かは、私にとって自明である。というのは、実はこれは、かつてある雑誌の研究余滴欄に寄せた拙文の冒頭部分だからである。[1] 自明なのは当然だろう。だが、これまた当然のことながら、他人の文・文章については事情が異なる。たとえば前稿[2]で論じた谷崎潤一郎の『蘆刈』は次のように始まっている。《まだをかもとに住んでゐたじぶんのあるとしの九月のことであつた。あまり天気のいゝ日だつたので、ゆふこく、といつても三時すこし過ぎたころからふとおもひたつてそこらを歩いて来たくなつた。遠はしりをするには時間がおそいし近いところはたいがい知つてしまつたしどこぞ二三時間で行つてこられる恰好な散策地でわれもひともちよつと考へつかないやうなわすれられた場所はないものか

としあんしたすゑにいつからかいちど水無瀬（みなせ）の宮へ行つてみようと思ひながらついをりがなくてすごしてゐたことにこゝろづいた。》谷崎は実際に岡本に住んでいたことがあるのだから、以上の文では谷崎自身によって実際の体験が語られているような印象を受ける。そしてこの印象は、読み進むにつれ、語りのスタイルとその内容から見ていよいよ強められる。ところがさらに読み進むと、満月の下、語り手が淀川のほとりの芦の茂みにたたずみ、かつてこのあたりをにぎわした江口の遊女に思いをはせるところが出てくる。語り手は興の乗るままに浮かんだ句を書きつける。と、突然近くの茂みから男が現れ彼に声をかける。男は自分も月見をしているのだと説明し、乞われるままにここまで月見に来た理由とそれをめぐる話を語り出す。ここから『蘆刈』は語り手がこの男に代わり、この第二の語り手から彼の父親とその妻、そして実際の愛人である妻の姉との間の奇怪で長い愛の物語が展開される。しかもそれだけでなく、聞き終わった谷崎と思しき第一の語り手が、腑に落ちぬ点を男に質問する。と、そのとき男の姿は既になく、『蘆刈』のテクストは、《たゞそよ〳〵と風が草の葉をわたるばかりで汀にいちめんに生えてゐたあしも見えずそのをとこの影もいつのまにか月のひかりに溶け入るやうにきえてしまつた》と結んで幕を閉じる。ここに至って読者は、たとえ『蘆刈』を語っているのが作者の谷崎自身だとしても、少なくともその後半の内容は現実の出来事ではなく、幻想（フィクション）の領域に属するものだと考えざるを得なくなる。だが、たとえ語り手が谷崎自身でなく、またこの物語が一種のフィクションだとしても、この作品の幕を開き、それを閉じる第一の語り手が、テクスト全体を自身の物語として統率しているという印象そのものは変わらないだろう。これは言い換えれば、『蘆刈』においては、第一の語り手が、そのテクスト全体を統率している作者谷崎と同等の確固とした実在感を獲得しているということである。

それでは夏目漱石の『坊っちゃん』[3]の場合はどうだろうか。これが、《親譲りの無鉄砲（むてっぽう）で小供の時から損ばかりしてい

る》と、それまでの自らの身の上をかこつ主人公の言葉で始まることは周知の事実である。彼はこれに続けて、その事情の説明として、まず子供時代の逸話をいくつか挙げる。しかし、事実問題として既にこの段階で明らかなことは、この語り手が作者漱石ではありえないということである。この点で、同じく一人称の語りであっても、『坊っちゃん』は、先の『蘆刈』とは明らかに異なっている。それではこの作品の主人公「坊っちゃん」と、物語のテクスト全体を統率している語り手の「おれ」との関係はどうだろうか。つまり、『坊っちゃん』というテクストは、主人公自身が語った作品なのだろうか。またこの作品が告白小説と呼べるならば、それはどういう意味においてなのだろうか。以下、本稿ではこの問題を裏側から照らすものとして、『坊っちゃん』のテクストにおける会話と主人公の内的モノローグの関係に着目し、分析を進める。まず第一節と第二節の前半でその予備的考察として、この作品のナレーションの特質を「一」章全体と「二」章冒頭のテクストについて概観し、それを踏まえて第二節後半から第四節を通して、「五」章での赤シャツ・野だいこ・主人公坊っちゃんの沖釣りのエピソードを対象として、会話と内的モノローグの関係を具体的に考察する。また併せてこの問題を、「八」章での昇給辞退をめぐる坊っちゃんと赤シャツの応酬についても検討し、この作品での内的モノローグの表現上の意味を確認する。

第一節　『坊っちゃん』の語り手と主人公——無鉄砲とプライド

本節ではまず『坊っちゃん』の「一」章について、その語り（ナレーション）の特質を検討する。この冒頭部分、つまり作品の最初の部分の語りは、主人公の現在と少年時代の二つの対極的な視点から構成されている。まずこの点から見て

みよう。『坊っちゃん』のテクストは次のように始まっている。（以下で①などの記号は引用者による。）

《①親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。②小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。》（七頁）

この有名な書き出しの文章では、語り手はまず最初の文①で今までの自分が世間で貧乏くじばかり引いてきたことを述べ、続けて②以下で小学生の時の大けがのいきさつを回想する。だが、その語りの口調は①と②以降では対照的である。①が《損ばかりしている》と身を託つ嘆きの口調であるのに対して、②以降にはそのような響きは感じられない。あるのは、問題の無鉄砲な行為をさして気に留めずにしたという、一種他人事のようなニュアンスであり、それはまた、その時にはそんなことを無鉄砲ともなんとも思っていなかったというプライドじみた響きだろう。この後の点は、この理由説明にすぐ続く、《二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるか》と父親に叱られ、《この次は抜かさずに飛んで見せます》と言い返した彼の言い種に一層よく現れている。（ちなみにこの父親の非常識な叱責の言葉は、主人公の言う《親譲りの無鉄砲》の内実がいかなるものかを暗示している。）続けて彼が引き合いに出すエピソード、すなわち自慢のナイフを、光るだけで切れそうもないと友達にケチをつけられ、何でも切ってみせると受け合ったところ、そんなら君の指を切ってみろと言葉尻を捉えられ、何だ指ぐらいと親指をナイフで切りつけた話も、自分には二言はないとメンツを通すのに胸を張

る子供時代の彼の心意気と行動を表している。

それでは①と②以降がともに主人公の現在の時点における発話だとすれば、以上のニュアンスの違いは何に起因しているのだろうか。ここで注意すべきは、①が純粋に現時点（以後T_0で表す）の主人公の判断を表しているのに対して、②以降が実質的に表しているのが、現時点ではなく、子供時代（以後T_1で表す）の彼の意識だという点である。言い換えれば、①で語り手としての主人公が取っている視点は、まさしく今語りつつある現在の彼自身の視点だが、②以降での視点は、それとは異なる子供時代のそれだということである。つまり後者では、語り手は校舎の二階から飛び降りた時の自分に同一化ないし変身して、その時の意識と行動を再現している。このことは、ナイフで指に切り付けたエピソードの語りについても変わらない。だがこの二番目のケースでは、最初の場合と違って、以上のエピソードの直後に主人公の次のコメントが現れる。《幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。》この文が表しているのは、明らかにナイフで切りつけた時の彼の意識ではなく、現在の彼の判断である。つまりここでは事件当時の自分に同一化していた語り手は、既に現在の彼自身に戻っている。そしてその口調は、冒頭の①と同じく、子供時代の自分に対する距離を置いた回顧の情だろう。

以上のように、『坊っちゃん』冒頭のテクストは、語り手の対照的な二つの視点と心情間の往復（時間的には$T_0 \rightarrow T_1 \rightarrow T_0$）から構成されている。そしてそこでの過去の出来事を述べる文は過去形（タ形）で、現在時点T_0からの判断を表す文は現在形で表現されている。この時制の用い方は、会話など対人的コミュニケーションに通常見られるものである。ところがすぐこの後に、新たに子供時代の第三のエピソードを導入する一連の文では、このストラテジーとは違って、過去の事態を表すのに現在形が用いられることになる。次がそれである。

《庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりに聊かばかりの菜園があって、真中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに脊戸を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。》（七頁）

ここで現在時制によって言及されている庭も栗の木もともに主人公の子供時代のそれであり、彼が《命より大事》、《落ちた奴を拾ってきて、学校で食う》と言っているのもやはり同時期のことである。つまりこれらの文では、語り手はもはや現在の彼ではなく、子供時代T_1でのかつての自分に変身している。ここに現在時として再現されている時間は、このT_1における現在である。ところがこれに続く文では、《菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅がいた》と、今度は文末動詞が「タ」形となって過去の事態が回想されている。つまりここでは既に語り手は子供時代T_1の時点にはいず、語りの現在T_0の時点からT_1の事態を述べている。この語り手の視点の時間的推移$T_1 \rightarrow T_0$は、先のテクスト始めからナイフの傷跡のエピソードまでの$T_0 \rightarrow T_1 \rightarrow T_0$の後半部分と類似している。しかし注意すべきは、これら二つのテクストにおける語りのスタイルの違いである。今問題にしている栗の木と勘太郎のエピソードを導入する、《庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりに聊かばかりの菜園があって（……）この質屋に勘太郎という十三四の倅がいた》という一連の文に認められるのは、語り手の口調がそれまでの対人的コミュニケーションから、いわゆる物語を展開するスタイルに変わっていることである。最後の文の文末の「タ」が示しているのは、この文が物語の登場人物を導入する際の常套型だという事実だろう。続けて語り手は、今導入した新たな登場人物について次のように説明する。《勘太郎は無論弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。》ここでの語り手の口調は、主人公自

身の声というより、物語の枠を設定する者のそれである。勘太郎についての説明に先立つ《無論》という語やこの文の動詞の現在形はこのためのものだろう。ところがこのように舞台とキャラクターを一度設定すると、途端に語り手は再び勘太郎が栗を盗みに来た当時の主人公に変身して、彼をとっちめた話の顛末を、もう一つの「無鉄砲」の例として次のように展開することになる。

《ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷の袖の中に這入った。邪魔になって手が使えぬから、むやみに手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがって袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向へ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうといった。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫びに行ったついでに袷の片袖も取り返して来た。》（八頁）

このエピソードで語られている「無鉄砲」は、先の二つの場合の「無鉄砲」とは異なっている。この時の勘太郎への主人公の行為がそうだというのは、山城屋と自分の親との関係を彼が考慮しなかったといった事情があったからだろう。しかし、この一連の語りでは、そうした裏面の説明ではなく、まず勘太郎と取っ組み合いをしてとっちめたその具体的経緯

が、相手を迎え撃つ者の視点から、「タ」で終わる一連の文を重ねる形でこまごまと時系列的に再現されている。だがこのエピソードでの表現の眼目は、単にこれらの出来事だけでなく、最後にさりげなく語られる、詫びを山城屋に入れる母親の姿と、彼女が袷の片袖を持って帰ったのを、《取り返して来た》と誤認する主人公の意識の上にも置かれている。つまりここでの主人公には無鉄砲さの自覚はなく、逆に語り手が表現しようとしているのは、まさしくこの裏の意味なのである。この語り手の再現の仕方には、明らかに勘太郎事件での主人公に対する批評が含まれている。だが、これは現在の主人公自身の自己批判の現れなのだろうか。言い換えれば、『坊っちゃん』の冒頭で開口一番これまでの自分の無鉄砲を嘆く主人公の言葉は、はたして主人公自身のものなのだろうか。以上の詫びを入れさせられる母親のエピソードは、これに続いて彼が面白半分に近所の田畑の灌漑設備をこわしたり、作物を荒らしたりするエピソードに引き継がれ、ここでも《たしか罰金を出して済んだようである》と、さもなんでもなかったかのように締めくくられる。そして彼は親の怒りなどとんと存ぜぬとばかり、《おやじはちっともおれを可愛(かわい)がってくれなかった。母は兄ばかり贔屓(ひいき)にしていた》と不満げに述べる。ここには自分のしたことを親の側から見るという視点は皆無である。うかがえるのは、兄とは反対に、彼らから見捨てられているという思いだろう。事実、彼は《おれを見る度にこいつはどうせ碌(ろく)なものにはならないと、おやじがいった。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母がいった》と両親の言葉を引用する。ところがこの直後に続くのは、それにあっさり承服する彼自身の、《なるほど碌なものにはならない。御覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである》、という現時点T_0での判断である。ここにはもはや子供時代の向こう見ずさに胸を張った時の意地は見られない。あるのは一種の敗残者の意識だろう。つまりこの『坊っちゃん』の主人公の告白は、この敗残者の意識の上になされているわけである。

以上のように、彼の視点は意気盛んな子供時代といわばうらぶれた現在の大人の彼の対照的な二極から構成されている。だが、この二つを貫いて変わらないものが一つある。それは、両親との間に庇護・愛着といった親密な関係がないばかりか、彼らから排斥され、しかもその理由を主人公自身が今になっても理解できないことである。彼は母の病臥中にもかかわらず、遊び半分に台所で宙返りを打ってへっついで肋骨を強打し、《お前のようなものの顔は見たくない》と申し渡される。言葉通り親戚宅に身を隠すと、その三日後に母親が病死し、早死にしたのはお前のせいだと兄からせめられた彼は、今度は兄をぶって、父親から叱られる。この父親について彼は次のように明言する。《おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあったもんだ。》このような家族との関係と対極をなすのが、これに続いて語られる、十年来の下女である老婆の清(きよ)との関係である。だが、彼のいうこの下女の盲目的な愛も、子供の彼にとっては、父の怒りと同じく、単なるよそ事のようにしか映らない。ある時、将棋で待駒に引っかかって困っている自分を相手の兄が冷やかして面白がる。卑怯なと腹を立てた彼が駒を眉間めがけて投げつけると、命中して割れた傷から血が少し出る。兄が父親に言い付けると、父が勘当すると言い出す。仕方がないと観念していると、この清が泣きながら父親に詫まって、ようやく父親の怒りが解ける。ところが自分のこの時の内心を、当人の彼自身は、《それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえってこの清と云う下女に気の毒であった》と言明する。これはこの時の清が彼にとって、父親同様、いまだ他人に等しい存在だったということだろう。だが、一端こうして肉親とは対極的な清という登場人物が現れるや、新たなナラティブが語り手の口から流れ出す。というのは、先の他人行儀な受け止め方にもかかわらず、彼を「坊っちゃん」と呼んで一方的な偏愛ぶりを示す彼女に、彼は初めて喜びを見出し、それまで感じたことのなかった人間的な感情が彼女との間に萌すことになったからで

ある。『坊っちゃん』のストーリーの中心部分をなす、彼の四国の中学での数学教師生活の背景をなすのは、「一」章の末尾で語られる次の清の姿である。

《出立の日には朝から来て、色々世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た歯磨と楊子と手拭をズックの革鞄に入れてくれた。そんな物は入らないといってもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を眺と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな声でいった。目に涙が一杯たまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣く所であった。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。》（一七―一八頁）

注意すべきは、この場面での自分を再現している語り手は、もはや冒頭で自分の無鉄砲を嘆いている彼ではないということである。無鉄砲さのエピソードを語る彼は、ひたすら自分の所業を「それはなぜか」と問う人を仮定して弁明していた。しかし、この清との別離のシーンを語る彼は、もはや自分の所業の弁明者ではなく、その時の清の心遣いを彼女の言動を通して描いている。言い換えれば、彼の語りは、それまでのいわば彼から出て聞き手（あるいは読者）に向かう一次元の線ではなく、彼と他者の間の相互作用を再現する二次元的ないし三次元的なものに変化している。そして重要なことは、この変化にともない、最初に想定された聞き手（読者）の存在が希薄化することである。それを直截に示すのが右の「一」章末尾のエピソードの直後に置かれた、「二」章冒頭のエピソードの表現のされ方である。次節ではまずこの点を検

討する。

第二節　会話の発話表現と内的モノローグ――沖釣りに誘う赤シャツと「坊っちゃん」のエピソード

『坊っちゃん』の「二」章は次のように始まっている。

《ぶうといって汽船がとまると、艀（はしけ）が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真っ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。尤もこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めていても眼がくらむ。》（一八頁）

これは、清に見送られて東京を後にした主人公が、赴任地の四国の海岸近くに着いた汽船の上から、上陸用のはしけのやって来るところを見ている場面である。一見して明らかなように、このナレーションのスタイルは、前節最後に引用した清の見送りシーンのそれとは著しく異なっている。まず見送りシーンで取られている語りの手法は、通常の物語のように、語り手が語りの現在（時点T_0）からこの過去（時点T_2）の出来事を回想する形式である（以下、四国赴任の時期ないし時点をT_2で表す）。それに対してこの「二」章冒頭では、過去の出来事の回想ではなく、今現にはしけのやって来るのを前にした語り手が、船頭と海辺の外光、暑さなどから触発された感覚と判断を反射的に表白している。ここでの語り手の言葉は、含意された読者を含め、特に誰かに向かって語られたといった性質のものではないだろう。彼は目的地の港の

岸辺に着いて、そのとき受けた印象と思ったことをただ直截に表現しているだけである。だが、こういう言い方は正確ではない。なぜなら、実はここでは語り手と主人公の「坊っちゃん」を区別することが必要だからである。周知のように、「坊っちゃん」と名指されたこの主人公は、私的な会話での悪口には、言葉遊びじみたアドリブのレトリック感覚は達者なものの、公的な場での意見の開陳や書き言葉（清宛ての手紙、辞職願いの文面）の能力は極めて貧弱である。日常の話し言葉についても、会話の場面での彼の発話と、それが量的にごく少ない点から推して同断だろう。ところが既に前節で検討した「一」章での彼の語りは、冒頭の嘆きの開陳から最後の清の見送りの場面のナレーションに至る展開において、処々に書き言葉的な語法を用いながらきわめて巧妙かつ表現効果豊かになされている。『坊っちゃん』の語りでまず注意を引くのは、この語り手と主人公の言語的表現能力の際立った落差である。「はじめに」で検討した谷崎の『蘆刈』の場合には、同じく一人称の語りであっても、「私」で言及されている主人公を谷崎と想定しても、それと語り手の間に特に文体上の不自然さは生じなかった。（ただしこういっても、主人公が谷崎自身と考えるべきか否かは別問題である。）ところが、『坊っちゃん』の場合には事情は明らかに異なる。このことは、この作品が主人公の自画像あるいは自己表現ではないことを意味している。清から「坊っちゃん」と呼ばれ、この作品で語られている出来事を体験した男がいたとしても、問題の彼をめぐる出来事とそこでの彼の意識と言動をテクスト化している語り手は彼とは別人である。主人公は反射的に行動する人間であり、語り手は他者に向かって表現する能力のない彼に代わって、その内心と言動を表現する役割を担っている。

本節冒頭に引用したテクストが示すように、そこには主人公の外界から受けた直接体験が鮮やかに表現されている。『坊っちゃん』で表現の眼目となるのは、まさしくこのような主人公の外界と他者から受けた印象と、それに対する彼の

反射的言動であり、わけても実際には発話されない彼の内心の動きである。「五」章で語られる主人公と赤シャツ、野だいことの沖釣りの場面はこの点を鮮やかに例証している。赴任後間もなく宿直の役が回ってきた彼は、その夜寄宿生の仕組んだバッタ事件に見舞われ、ひと騒動がもちあがる。生徒が彼の寝床に隠しておいたバッタの群と格闘した挙句、彼はその夜中、彼らと一戦を交え、翌朝校長の裁定を受ける羽目に陥ったのである（「四」章）。以下が、このエピソード直後に章を改めて語られる沖釣りの場面の冒頭部分である。教頭の赤シャツが、主人公を沖釣りに誘う。

《君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪るいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りゃしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれ位な声が出るのに、文学士がこれじゃ見っともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅（こうめ）の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいといったら、赤シャツは顎（あご）を前の方へ突き出してホホホホと笑った。何もそう気取って笑わなくっても、よさそうな者だ。》（四六頁）

この一節の語り方でまず注目すべきは、最初の文、《…と赤シャツがおれに聞いた》の文末の動詞の「た」（タ形）が、過去の出来事の回想ではなく、現にいまその時点で完了した事態を表していることである。そしてこの後に用いられている《返事をしたら》、《いったら》、《笑った》の文末の「タ」形は、いずれも今進行中の二人の発話行為で、それぞれその

時その時に完了した事態の連鎖を表現している。ところで右の二人のやりとりのうち、実際に相手に向けて発話ないし声を出して表現された部分だけを取り出すと次のようになる。（それぞれの該当箇所に「　」を付す。）

《「君釣りに行きませんか」／「そうですなあ」／「君釣をした事がありますか」／「あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれは今考えても惜しい」／「ホホホホ」》

ここで赤シャツの笑いを誘っている主人公の返答は、その前の二人の発話に比べて書き言葉的だが、これは引用形式が間接話法のためだろう。この間接話法形式が端的に示しているのは、二人の会話が語り手のナレーションの形で再現されていることである。そして一見して明らかなのは、このナレーションがわけても表現しようとしているのが、以上の二人の発話自体というより、発話には現れていない主人公の、赤シャツの言葉に触発された内心の動きだということだろう。例えば彼は釣りに誘われて、一言《そうですなあ》と答えるのみだが、テクストで長々と語られるのは、この短いやりとりの間に挿入された、《赤シャツは気味の悪るいように優しい声を出す男である》以下の赤シャツの声の出し方に対する、主人公の声に出さない批評である。しかもその批評は、男・帝国大学出という近代的富国強兵時代の彼の社会的身分にその声がそぐわず、《見っともない》とやりこめる反面で、その言葉と態度に《失敬な事を聞く》、《そう気取って笑わなくっても、よさそうな者だ》と、自尊心を傷つけられ、反発するという屈折したものである。この言葉には出さない感情的反発は、続く赤シャツの言葉によってさらにつのり、その様が自己正当化の理屈とともに次のように展開される。

《「それじゃ、まだ釣の味は分らんですな。御望みならちと伝授しましょう」と頗る得意である。だれが御伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくって、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だって、鳥だって殺されるより生きてる方が楽に極まってる。釣や猟をしなくっちゃ活計がたたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくっちゃ寝られないなんて贅沢な話だ。》（四六―四七頁）

ところがこれは彼の心の内だけの反駁で、実際には口に出さなかったことが、回想の形で次のように語られる。

《こう思ったが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じゃ叶わないと思って、だまってた。すると先生このおれを降参させたと癇違して、早速伝授しましょう。御ひまなら、今日どうです、一所に行っちゃ。吉川君と二人ぎりじゃ、淋しいから、来給えとしきりに勧める。》（四七頁）

この一節で興味深いのは、口に出さなかったことの理由づけに続く、それを赤シャツが誘いの受諾と誤解したという主人公の解釈の表現の仕方である。この時のやりとりは現実の事態としては、単に黙っているだけの主人公に、赤シャツが《早速伝授しましょう（……）来たまえ》と言っただけのものに過ぎない。主人公が、勘違いだと思ったとしても、それは赤シャツの《来たまえ》を聞いた後のことだろう。しかしテクスト（語り手のナレーション）では、いかにも赤シャツの反応（発話）が、主人公の推測した因果関係通りに展開したように表現されている。この事実は、語り手が、(1)時間T_2において進行している二人のやりとりを現在進行中の形で表現すると同時に、(2)そこでの因果関係を語りの現在T_0におい

て表現していることを意味している。言い換えれば、語り手は、一つ前の文、《こう思ったが向うは文学士だけに（…）だまってた》で一度語りの枠組みを回想形式に転換した後、続く問題の文でもこの回想形式に立ちながら、しかし二人の会話そのものは、それ以前の方式、すなわち会話の時点T^2での主人公の意識の流れに依拠する形で、その心の動きと赤シャツの発話を表現しているわけである。そして次いでこの回想形式を利用して、主人公の口からこの場面でのもう一人の主要人物について、読者に対する次のような説明がなされる。

《吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも随行して行く。まるで同輩じゃない。主従見たようだ。》（四七頁）

しかし注意すべきは、ここでの第二文以下で、語り手が第一文の読者に向かう姿勢から、再び主人公の内側にもぐりこむ姿勢に転換していることである。吉川の名を聞いて、それが野だいことあだ名付した英語教師であることを彼の口から説明した後、語り手はこの英語教師の日頃の行動が主人公の内に引き起こす疑念と、それについての自問自答を彼の内的モノローグによって表現する。この手法によって、テクストには、主人公の心の世界に映し出された赤シャツと野だいこの関係と、それにどう対処すべきかと身構える主人公の心理的緊張が表現されることとなる。ここでの時間は回想されたそれではなく、今現に生起しているものとして表現されている。そしてこの時間の流れの延長上に、さらに赤シャツの誘いの動機を詮索する主人公の自問自答が同じく内的モノローグで続き、最後にこの沖釣りシーン冒頭の間接話法形式に戻って、以上の思案の末に赤シャツに返した主人公の返答が提示され、ひとまずこのエピソードの導入部が閉じられるこ

とになる。以下がそのテクストである。

《赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極っているんだから、今更驚ろきもしないが、二人で行けば済む所を、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだろう。大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣る所をおれに見せびらかすつもりかなんかで誘ったに違ない。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮪の二匹や三匹釣ったって、びくともするもんか。おれだって人間だ、いくら下手だって糸さえ卸しゃ、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌だから行かないんじゃないと邪推するに相違ない。おれはこう考えたから、行きましょうと答えた。》（四七頁）

右の内的モノローグで表現されているのは、自分の言動の動機が赤シャツによって誤解されることに対する主人公の恐れであり、正確には自分が弱みを隠したがっていると見られることへの恐れである。とともに、この赤シャツとの会話でうかがえるのは、彼の声の出し方を女のようで外聞にそぐわずみっともないと内心でけなしながら、主人公が彼に無意識的に感じ取っているのは、自分を超える者に対するある種の恐れの感情だろう。《大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣る所をおれに見せびらかすつもりかなんかで誘ったに違ない（…）おれだって人間だ、いくら下手だって糸さえ卸しゃ、何かかかるだろう》という彼の内心の煩悶は、この彼の内面を一種戯画的に表現している。これはまた、子供時代の彼が友達の売り言葉に買い言葉で応じたことに通じるものだともいえるだろう。いずれにせよ、実際の発話とはならずに、しかし彼の現実の行動を動機付ける、一種戯画化された思念の動きを鮮やかに表現することが、『坊っちゃん』のテクストの

一つの眼目をなしている。次節では、以上の場面に続いて、このようなテーマが一層細密に追及されるこの沖釣りのエピソードの展開部を検討する。

第三節　沖釣りのシーンでの赤シャツ・野だいこと坊っちゃん

沖釣りのシーンの展開部は、主人公の次の回想の文から始まる。《それから、学校をしまって、一応うちへ帰って、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行った。》これは語り手が語りの現在T_0に立って展開しているナレーションであり、新たなエピソードを導入する際の常套方式の一つである。ところがこの次の釣り船と船頭を導入する文では、既に語りの座標軸が、これから沖釣りに出かける現場の時間・空間に移っている。次がそれである。《船頭は一人で、舟は細長い東京辺（へん）では見た事もない恰好（かっこう）である。》以後、この現在の事態と出来事の表現スタイルを基本的枠組みとして、語りが展開される。その第一段階として、船を漕ぎ出した船頭が、《此所（ここい）らがいいだろう》と釣り場を定めて碇を下ろすまでの船中の場面で、テクストから三人の会話の発話部分だけを取り出すと次のようになる。発話者を（　）内に示す。引用符（「　」）の有無の別はテクストでの表示である。

《（赤シャツ）いい景色だ／（野だいこ）絶景でげす／（赤）「あの松を見給え、幹が真直（まっすぐ）で、上が傘のように開いてターナーの画（え）にありそうだね」／（野だ）「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」／（主人公）あの岩のある所へは舟はつけられないんですか／（赤）つけられん事もないですが、釣をす

るには、あまり岸じゃいけないです／（野だ）どうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんか／（赤）そいつは面白い、われわれはこれからそういおう／（野だ）あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜ／（赤）マドンナの話はよそうじゃないかホホホホ／（野だ）なに誰もいないから大丈夫です》（四八―四九頁）

この場面でもしゃべっているのはもっぱら赤シャツと野だいこで、発話部分を見るかぎり、野だいこの最後の言葉のように、主人公はまるでいないかのごとく扱われている。ところがテクストで大きな部分を占めているのは、内的モノローグで示される、二人のやりとりに対する主人公の口には出さない激越な反応ぶりである。なるほど彼の心理の表白の最初の部分は、いつのまにか沖へ出た船の上から眺める対岸の寺の五重塔や、向こうの島の石と松ばかりの姿に感心し、聞こえてくる赤シャツと野だいこの声に同調して、《いい心持には相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは薬だと思った。いやに腹が減る》と、自分だけの感覚世界に充足した姿を示している。島の松についてのターナー云々の二人のやりとりも、《ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙っていた》と、彼には無縁であり、島を右に見て旋回した船の上で、ただ《波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平（たいら）だ》と、すっかり感心し、《赤シャツの御蔭で甚だ愉快だ》とご満悦の体である。彼が島の岩を指して、《あの岩のある所へは舟はつけられないんですか》と聞いたのも、《出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思ったから》である。だが、そのあたりで釣りをしたいのかと誤解したらしい赤シャツは、そんな岸の近くではだめだと彼の希望を退ける。すると島の話にかこつけて、野だいこが先ほどの赤シャツのターナー云々に迎合して、島をターナー島と命名することを提案する。我が意を

得たりと喜んだ赤シャツは、即刻《われわれはこれからそういおう》と賛意を表する。これを聞いてそれまでご満悦だった主人公の心理が激変する。彼の内的モノローグ、《このわれわれのうちにおれも這入ってるなら迷惑だ》がそれである。だが、野だいこは続けて赤シャツに媚びるように、《あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜ》と提案し、赤シャツが《マドンナの話はよそうじゃないかホホホホ》とごまかしても、《なに誰もいないから大丈夫です》と言って、ちょっと主人公の方を見て、わざと顔をそむけ、にやにやとする。ところがこの野だいこの言動が主人公の内面にさらに波紋を揺き立てる。次がその内的モノローグである。

《おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那だろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人に分らない事を言って分らないから聞いたって構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸っ子でげすなどといってる。マドンナというのは何でも赤シャツの馴染の芸者の渾名か何かに違いないと思った。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺めていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよかろう。》（四九頁）

この主人公の江戸っ子口調で展開される流暢な弁舌ぶりは、彼の実際の会話のぎこちない言葉づかいと著しい対照をなしている。しかもそれは相手の言葉に対する反感から紡ぎだされたものである。だが注意すべきは、これらの猛烈な反感を示す言葉が、相手の赤シャツと野だいこにはすべて隠されていることである。主人公が口下手を厭って意図的に隠ぺいしているか否かにかかわらず、このような彼の内的モノローグの部分を除いては、そもそも『坊っちゃん』という作品は

成り立たないだろうし、その面白さもないだろう。そしてなによりも彼の姿を生き生きと鮮やかに造形しているものこそ、この部分なのである。

沖釣りのこの後のエピソードは、まず右のような野だいこに対する主人公の嫌悪感と反感を基調に進行する。実はこの反感は、浜辺で彼が野だいこと言葉を交わした折に既に萌していたものである。船中を見渡しても釣竿が見当たらないので、《釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だろう》と彼が野だいこに聞く。すると《沖釣(おきづり)には竿は用いません、糸だけでげす》と教えられる。この時の野だいこの仕草と自分の気持を、彼は次のように述べる。野だいこの発話に続く箇所である。《と顎(あご)を撫でて黒人(くろうと)じみた事をいった。こう遣り込められるくらいならだまっていればよかった。》

さて、釣り場を見繕っていた船頭がいよいよ船をとめて、錨をおろす。赤シャツが水深を聞くと、六尋(むひろ)ぐらいだという。《六尋位じゃ鯛は六(む)ずかしいな》といいながら赤シャツが釣り糸を海へなげ込む。それを聞いた主人公が、《大将鯛を釣る気と見える、豪胆なものだ》と内心で驚く。この後の三人の会話シーンでの発話（間接話法で表現されている）のみを取り出すと次のようになる。それぞれの発話を「　」で括って示す。

《（野だ）「なに教頭の御手際じゃかかりますよ。それになぎですから」／（赤）「さあ君もやり玉え糸はありますか」／（主人公）「糸はあまるほどあるが、浮がありません」／（赤）「浮がなくっちゃ釣が出来ないのは素人ですよ。こうしてね、糸が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。――そらきた」／（野だ）「教頭、残念な事をしましたね、今のは慥(たし)かに大ものに違なかったんですが、どうも教頭の御手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断が出来ませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨(にら)めくらをしている連中よりは

ましですね。丁度歯どめがなくっちゃ自転車へ乗れないのと同程度ですからね」》（四九―五〇頁）

この最後の野だいこの発話は、釣り糸をたくしあげると、餌だけ取られて何もかかっていなかった赤シャツへのお世辞だが、これを聞いて主人公は、《野だは妙な事ばかり喋舌る。よっぽど撲りつけてやろうかと思った》という衝動に駆られる。だが同時に、赤シャツを《いい気味だ》と思ったものの、彼は次のようにも告白する。《おれだって人間だ、教頭ひとりで借り切った海じゃあるまいし。広い所だ。鰹の一匹位義理にだって、かかってくれるだろう》。この赤シャツに対する彼の対抗意識は、前節でみたマグロ云々のエピソードと大同小異である。ここでも彼が、《おれだって人間だ》と居直って見せているのは、赤シャツからの今まで感じたことのないような威圧感に脅かされていることの現れだろう。釣り糸を海に放り込んでからの様子を、彼は以下のように語る。

《しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくっちゃ、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸いておらん。船縁から覗いて見たら、金魚のような縞のある魚が糸にくっついて、右左へ漾いながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちゃりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになった。漸くつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大に気味がわるい。面倒だから糸を振って胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をざぶざぶと洗って、鼻の先へあ

てがって見た。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ、何が釣れたって魚は握りたくない。魚も握られたくなかろう。そうそう糸を捲いてしまった。》（五〇頁）

この一節でも、語り手は回想の形式を取りながら、同時に現場の主人公の立場から、その時の彼の意識と行動の生起するさまを内側から再現している。主人公「坊っちゃん」の何よりの特徴は、ここに彼が繰り広げているような、生きのよい感覚的反応と行動の連続であり、『坊っちやん』の特異な一人称のナレーションは、それを表現するための不可欠のツールとなっている。他方これとは対照的に、赤シャツと野だいこは、いわば言葉のゲーム感覚的な世界に住む人間である。《一番槍は御手柄だがゴルキじゃ》と野だいこが評する。それに主人公が《野だがまた生意気をいう》と反発する。だが、同じ言葉を聞いても、赤シャツの受け止め方は異なっている。次が彼と野だいこの会話の発話部分（テクストでは間接話法）である。《「ゴルキというと露西亜の文学者見たような名だね」／「そうですね、まるで露西亜の文学者ですね」》。ところがこの二人のやりとりを聞いて、それぞれを《と赤シャツが洒落た》、《と野だはすぐ賛成しやがる》と評した主人公は、今度は赤シャツに対する反感をアドリブの駄洒落を混じえて次のように展開する。

《ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があったものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。いうならフランクリンの自伝だとか『プッシング・ツー・ゼ・フロント』だとか、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々『帝国文学』とかいう真赤な雑誌

を学校へ持って来てありがたそうに読んでいる。山嵐に聞いて見たら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。『帝国文学』も罪な雑誌だ。》（五一頁）

しかし重要なのは、単なるこれらの駄洒落や言い回しの巧妙さではなく、それらがまるでサンドバッグに打ち込むフックのように繰り出されていることである。これは回想的なナレーションでは表現しえない効果だろう。一時間ばかりやってみてもゴルキばかりしか釣れない赤シャツと野だいこが、《今日は露西亜文学の大当りだ／あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方がありません。当り前ですな》と話しているのを横目に、船頭からゴルキが肥料にしかならないのを聞いた主人公は、《赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ》と、内心冷笑の体で、《胴の間へ仰向けになって、さっきから大空を眺めている》る。すると思いは清のことに飛んでいく。《金があって、清をつれて、こんな奇麗な所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう》という思いがそれである。そしてそれは、野だいこへの嫌悪感と相俟って、彼に対する次のような批判となる。

《いくら景色がよくっても野だなどと一所じゃ詰らない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たって恥ずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やっぱりおれにへけつけ御世辞を使って赤シャツを冷かすに違ない。江戸っ子は軽薄だというがなるほどこんなものが田舎巡りをして、私は江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まってる。》（五二頁）

ところがこう自己流の思いにふけっていると、突然二人のくすくす笑いの声がする。そしてその合間にとぎれとぎれに聞こえてくる言葉の端に、彼の神経が反応する。次がその二人のやりとりである。この部分はテクストでも直接話法で表示されている。

《「え？　どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バッタを……本当ですよ」》

《「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動して……」「団子も？」》（五二頁）

以下がこれに対する主人公の反応である。

《言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バッタだの天麩羅だの、団子だのという所を以て推し測って見ると、何でもおれのことについて内所話しをしているに相違ない。話すならもっと大きな声で話すがいい、また内所話をする位なら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バッタだろうが雪踏だろうが、非はおれにある事じゃない。校長が一と先ずあずけろといったから、狸の顔にめんじてただ今の所は控えているんだ。野だのくせに入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしゃぶって引っ込んでるがいい。おれの事は、遅かれ早かれ、おれ一人で片付けて見

せるから、差支えはないが、また例の堀田がとか煽動してとかいう文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動を大きくしたという意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたというのか方角がわからない。》（五三頁）

だが、実は赤シャツが主人公を野だいことの沖釣りに誘ったのは、これを聞かせるためではなかったのか。岸に戻る船の上で、彼はこれを枕に主人公に話を切り出す。テクストは、野だいこをまじえたこの三人のやりとりの主要部分を、発話のみを際立たせる自由直接話法の形で表現することになる。次節ではまずこれについて検討し、次いでそれを受けて「八」章で展開される主人公と赤シャツの会話場面を取り上げ、以上に概観した『坊っちゃん』における会話と内的モノローグの役割りを確認する。

第四節　赤シャツの言語ゲームと坊っちゃんの内的モノローグ

沖釣りのエピソードの最終部では、いよいよ赤シャツがこの日の本題の話を主人公に切り出すことになる。テクストはこれに先立って、《君釣はあまり好きでないと見えますね》と話を向ける赤シャツと、《ええ寝ていて空を見る方がいいです》と答える主人公のやりとりを、間接話法で導入する。だが釣りの話はほんの糸口に過ぎない。この直後に、《「君が来たんで生徒も大に喜んでいるから、奮発してやってくれ給え」と今度は釣にはまるで縁故もない事をいい出した》と主人公が述べているように、実は赤シャツの目的は教頭として彼を学内の話、それも自分の陣営へと釣込むことにある。テク

ストはまずこの赤シャツの言語ゲームへの誘いの言葉と主人公の返事を、野だいこの発話ともども自由直接話法と直接話法を併用して次のように展開する。

（…）、［　］内の箇所は主人公のナレーションもしくは内的モノローグの箇所である。

《「あんまり喜んでもいないでしょう」「いえ、御世辞じゃない。全く喜んでいるんです、ね、吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒ぎです」（…）「しかし君注意しないと、険呑ですよ」（…）「どうせ険呑です。こうなりゃ険呑は覚悟です」［（…）実際おれは免職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どっちか一つにする了見でいた。］》（五四頁）

バッタ事件で生徒たちと一戦を交えて学内騒動を引き起こした主人公に、赤シャツが褒めるように、実は君は喜ばれていると思いがけぬことをいう。だがその返す手で、しかし気を付けないと危ないと、今度は主人公の立場の危うさを指摘する。他方、学内事情などには興味もなければ気もまわらない主人公にとって、目下問題であるのは、自分か、生徒か、どちらが最後に喧嘩に勝つか、その勝負の片をつけることだけであり、いつ職を辞してもよいと腹を決めている彼には、危ないと聞かされても、そんなことはとうに覚悟の上だとにべもないことになるのは自然だろう。それをとりなすように、赤シャツが自分の本題の問題へ主人公を取り込もうと、親切心を匂わして話を次のように進める。

《「そういっちゃ、取りつき所もないが――実は僕も教頭として君のためを思うからいうんだから、わるく取っちゃ困る」「教頭は全く君に好意を持ってるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長く御在校を願っ

て、御互に力になろうと思って、これでも蔭ながら尽力しているんですよ」［（…）①野だの御世話になる位なら首を縊って死んじまわあ。］

「それでね、生徒は君の来たのを大変歓迎しているんだが、そこには色々な事情があってね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢だと思って、辛防してくれ玉え。決して君のためにならないような事はしないから」》（五四頁）

しかし野だいこの太鼓持ち的お追従どころか、元来言語ゲームなどに用も能力もない主人公にとって、赤シャツの親切ごかしの説明とほのめかしも、ただまだるっこく要領を得ないだけである。以下が続く二人のやりとりの自由直接話法による表現である。

《「色々の事情た、どんな事情です」／「それが少し込み入ってるんだが、まあ段々分りますよ。僕が話さないでも自然と分って来るです、ね吉川君」／「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にゃ到底分りません。しかし段々分ります、僕が話さないでも自然と分って来るです」（…）／「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うんです」／「そりゃ御尤だ。こっちで口を切って、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事をいって置きましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊には行かないですからね」／「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」／「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいというんですがね……」／「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にもかいときましたが二十三年四ヵ月ですから」／「さ、そこ

で思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」／「正直にしていれば誰が乗じたって怖くはないです」／「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないというんです」》（五四―五五頁）

ここに見られるのは、なんとか言葉で主人公をからめとろうとする赤シャツと、逆にその火の粉を追い払うのにやっきの主人公の姿だろう。赤シャツの関心はもっぱら人事と情実の世界にあり、彼の言葉はこの目的のために相手を動かすことである。他方、主人公にとっては、そもそも交渉の相手としての他者の存在など論外であり、彼にあるのはただ自分だけの世界である。彼の行動原理は《「正直にしていれば誰が乗じたって怖くはない」》であり、それに対して、赤シャツは《怖くはないが、乗ぜられる》、だから《気を付けないといけない》と親切めかして忠告する。だが実のところ、主人公を乗せようとしているのは赤シャツであり、彼は前任者の事件について問い返されると、次のように言葉を濁してはぐらかす。

《「僕の前任者が、誰れに乗ぜられたんです」／「だれと指すと、その人の名誉に関係するからいえない。また判然と証拠のない事だからいうとこっちの落度になる。とにかく、折角君が来たもんだから、ここで失敗しちゃ僕らも君を呼んだ甲斐がない、どうか気を付けてくれ玉え」／「気をつけろったって、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりゃ好いんでしょう」》（五六頁）

すると赤シャツがホホホホと含み笑いをして、次のように続ける。

《「無論悪るい事をしなければ好いんですが、自分だけ悪るい事をしなくっても、人の悪るいのが分らなくっちゃ、やっぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落なように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、滅多に油断の出来ないのがありますから……。②（…）》（五七頁）

《下宿の世話なんかしてくれても》と赤シャツが暗示しているのはもちろん主人公と同じ数学の教員で主任の堀田（山嵐）のことである。赤シャツはマドンナの件で敵対する堀田を追放するのに主人公を利用しようと、バッタ事件は彼が生徒を煽動したとほのめかして、二人が敵対するよう画策する。ところがこの姦策は当初功を奏するかに見えたものの、事件の処分について、教員会議で赤シャツが生徒に対する寛大な取扱いを願い、逆に山嵐が厳罰と主人公への公けの謝罪を主張したこと、さらにその後主人公が下宿の老婆から、マドンナ事件、すなわちマドンナこと、英語担当の古賀（うらなり）の許嫁で今やその気のない遠山の令嬢に赤シャツが目をつけ、妻にしようと彼女をなびかせたのを、堀田が古賀のために談判して以来、二人の折り合いが悪くなったと教えられたこと、しかもその夜、当の赤シャツがマドンナと散歩しているのに出くわして、翌朝そのことを指摘すると、赤シャツがそれを否定したことなどから、その根元が揺らぎだす（「七」・「八」章）。赤シャツはまた他方、自宅に主人公を呼んで、前任者の時より生徒の成績が上がって校長も喜んでいる。この前忠告したことを忘れずやってもらえれば、学校でも都合がつけば待遇の方ももう少しどうにかなるでしょうと話を向け、《「へえ、俸給ですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」》との返事を聞

くと、実は今度転任者があって、その関係で君の方の昇給の手当がつきそうなので校長に相談してみるつもりだと、話を切り出す。そして《「どうもありがとう。だれが転任するんですか」》と聞かれると、古賀だという。そして代わりの新任者の給料が安くなるのでその分を君に回せる。しかも授業時間は少なくなるが代わりに今より責任のあるポストをとほのめかし、《「判然とは今言いにくいが――まあつまり、君にもっと重大な責任を持ってもらうかも知れないという意味なんです」》と説明する。だが赤シャツの思惑など推し量るすべもない主人公には、彼の言葉の意味が一向わからない。

下宿に帰った彼は、そこの老婆に古賀の転出のことを話す。すると老婆は、彼の母親から聞いた話として、うらなりの転出が、実は彼の希望ではなく、学校側からうまく仕組まれた結果であることを教える。誰よりもうらなりに親近感を抱き、彼こそ君子の実例であり聖人だと感じている主人公は、それを聞くや即座に赤シャツ宅に再び出向いて昇給の辞退を申し出る。このエピソードで、彼と赤シャツのやりとりの発話部分のみを示すと次のようになる（「八」章）。

《「さっき僕の月給をあげてやるという御話でしたが、少し考が変ったから断わりに来たんです」（…）／「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」／「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」／「そうじゃないんです、ここにいたいんです。元の月給でもいいから、郷里にいたいのです」／「君は古賀君から、そう聞いたのですか」／「そりゃ当人から、聞いたんじゃありません」／「じゃ誰から御聞きです」／「僕の下宿の婆さんが、古賀さんの御母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」／「じゃ、下宿の婆さんがそういったのですね」／「まあそうです」／「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたの仰ゃる通りだと、下宿屋の婆さんのいう事は信ずるが、教頭のいう事は信じないというように聞えるが、そういう意味に解釈して差支ないでしょうか」

／（…）／「あなたのいう事は本当かも知れないですが――とにかく増給は御免蒙ります」／「それは益可笑しい。今君がわざわざ御出になったのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」／「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断りますよ」／「そんなに否なら強いてとまではいいませんが、そう二、三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変しちゃ、将来君の信用にかかわる」／「かかわっても構わないです」／「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一歩譲って、下宿の主人が……」／「主人じゃない、婆さんです」／「どちらでも宜しい。下宿の婆さんが君に話した事を事実とした所で、君の増給は古賀君の所得を削って得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余を君に廻わすというのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される、新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合のいい事はないと思うですがね。いやなら否でもいいが、もう一返うちでよく考えて見ませんか」／③（……）／「あなたのいう事は尤もですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断わります。考えたって同じ事です。さようなら」④（……）》

（九七―一〇〇頁）

この二人の会話が示しているのは、主人公の生きている世界が言葉、より正確には理屈の世界ではないという事実である。彼を動かしているのは、親愛なるうらなり君の不幸を利用して自分が昇給の分け前にあずかることへの嫌悪であり、赤シャツの言う管理者の計算上の理屈は、彼の行動決定の基準にはなりえない。彼と赤シャツとの間には、この点で原理

上対話あるいは交渉の余地はまったくない。彼が赤シャツの信用を失うことを恐れないのは、もともと二人の住む世界が根本的に異なるからであり、しかも彼がこの自分の生き方にプライドを感じているからである。だがこの彼の根本的態度あるいは心情は、赤シャツへの現実の発話となって現れることはない。従って赤シャツにとって彼は理不尽で不思議な人物と映るほかはないだろう。ただテクストには、それが彼の内的独白の形で長々と表現されることになる。会話の終わり近くに③（……）として省略した主人公のナレーションがそれである。そこでは、《いやなら否でもいいが（……）》とうながされて、《「あなたの云う事はもっともですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断わります（……）》と答えるまでの彼の思考プロセスが示されている。次がそれである。

《おれの頭はあまりえらくないのだから、何時もなら、相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違ってたと恐れ入って引きさがるのだけれども、(a)今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかった。途中で親切な女見たような男だと思い返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよっぽど厭になっている。だから先がどれほどうまく論理的に弁論を逞くしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向は赤シャツの方が重々尤もだが、表向がいくら立派だって、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力や理窟で人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭位な論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌で働らくものだ。論法で働らくものじゃない。》（一〇〇頁）

ここでダイクシス表現に(a)《今夜》が用いられ、またすべての文が現在形を取っていることが示しているのは、現に今主人公が赤シャツの家の玄関先にいて、これらの文を内心で発話しているという事態である。そしてこの彼の一連の発話が表しているのは、敵の口から次々と繰り出される理屈ずくの反論の弾丸を浴びながら、何としても自分の力でそれを跳ね返そうと闘う彼の内心の行為であり、さらにまたその力の源泉を自己の中に確認しようとする行為だろう。彼にこの防戦を決意させた動機の底にあるのは、まず《最初から赤シャツは何だか虫が好かなかった》という感触であり、マドンナ事件の真相を知るに及んで、彼の親切心が見せかけに過ぎず、その反動で今や彼への嫌悪がいや増したという事実である。彼にとって最終的に説得されるということは、相手に《腹の中まで惚れさせ》られることであり、理屈の上での出来事ではなく、心情の上の事柄である。彼にとって人物や意見に従うべきか否かの最終的な基準は、相手が善人か悪人かということであり、その人物の財力、権力、知的能力の優越性ではない。そしてこの最終基準である善悪の判定は、彼が最後に《人間は好き嫌いで働くものだ》というように、結局のところ彼自身の好みの問題に還元されてしまう。だが、これは単なる表面的な好みの問題ではないだろう。(4) この主人公のテーゼは、その後の彼の行動のすべてを導く原理となっている。当初下宿の仲介などで好感を持ったにもかかわらず、赤シャツのほのめかしで二枚舌を疑うようになった山嵐から、彼は下宿の主人が君の乱暴に文句を言っているから出てくれと、身に覚えのないクレームをつけられ、口論の末、不仲となる。しかし再び山嵐から、問題の主人が実は《君に懸物や骨董を売りつけて、商売にしようと思ってた所が、君が取り合わないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかったので君に大変失敬した勘弁し給え》と率直な謝罪を聞かされ、主人公は彼への信頼を取り戻す。そればかりか、好きなうらなり君のことなら、自分が代わりに延岡に行ってもいいとまで思う主人公は、今回の転出話は、赤シャツがマドンナを横取りす

るための姦策に違いないとの点で山嵐と一致し、力を合わせて赤シャツ制裁の策を練ることになる（「九」章）。この後は周知のように、赤シャツの策略で祝勝会での生徒たちのけんか騒ぎに巻き込まれて止めに入った山嵐と、彼に同行してそれに加勢した主人公が、ともにでっち上げの暴力事件で新聞沙汰になり、山嵐は辞職の詰め腹を切らされ、その意趣返しに鉄拳制裁を赤シャツに食らわせる機会を狙い、主人公がそれに加勢するというストーリーが展開される。二人は、赤シャツが芸者遊びにやって来るという旅館兼料理屋角屋（かどや）に面した宿屋の表二階の一室に陣取り、今夜は現れるかと、夜毎にその障子の穴から監視を続ける。するとようやく八日目の夜、なじみの芸者が連れの芸者と入ってからかなり間を置いて、通りで二人の悪口を言い合う赤シャツと野だいこの声がして、彼らが角屋に入るのを見届ける。そして明け方になって二人の出てきたのを追跡して捕え、糾問した末に山嵐は目的を実現し、主人公もまた、野だいこの顔めがけて、たまたまその日買った八個の生卵を投げつけ敲きすえて憂さを晴らし、赤シャツにも山嵐ともどもさらに鉄拳制裁を加えるという大団円になる（「十一」章）。

このようなストーリー展開と主人公の思考特性および行動様式からすれば、『坊っちゃん』のテクストが、会話部分における主人公の発話の論理の無さと寡黙さ（沈黙はその極端なケースである）と、その反面の、内心での発話されない相手への心理的反応と自己正当化の饒舌な言説となることはごく自然な成り行きだろう。テクストの構成が主人公の内心の煩悶によって長々とつづられることは、既に「四」章での、バッタ事件の当夜のエピソードにも顕著だが、続く「五」章の沖釣りのエピソードは、『坊っちゃん』の以上のような会話部分と内的モノローグの特殊な関係を端的に示している。そしてこの内的モノローグの表現手法でわけても重要なのが、先に見た主人公の①《野だの御世話になる位なら首を縊（くく）って死んじまわあ》に見られるように、他の手法では容易に表し難い、彼特有の発作に似た激越な感情の爆発を、この部分

が発話の力をともなって如実に表現している事実である。

おわりに

「五」章のナレーションで指摘すべき点が一つ残っている。それはこの章の終わり方の手法である。実は前節で検討した沖釣りのシーンでの赤シャツと主人公の会話の最後は、《親切に下宿の世話なんかしてくれても、滅多に油断の出来ないのがありますから……》と、暗に山嵐のことをほのめかした後、突然話題を転じて発した赤シャツの言葉を引用して、次のように終わっている。先の引用テクスト末尾の省略箇所②（…）の部分である。《「（…）大分寒くなった。もう秋ですね、浜の方は靄（もや）でセピヤ色になった。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と大きな声を出して野だを呼んだ。》この後テクストは以下のように続いて「五」章が終わる。

《なあるほどこりゃ奇絶ですね。時間があると写生するんだが、惜しいですね、このままにして置くのはと野だは大いにたたく。

港屋（みなとや）の二階に灯（ひ）が一つついて、汽車の笛がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯の砂へざぐりと、舳（へさき）をつき込んで動かなくなった。御早（おはよ）う御帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャツに挨拶する。おれは船端から、やっと掛声（かけごえ）をして磯へ飛び下りた。》（五七頁）

このナレーションがまず表しているのは、船とともにずんずん浜辺に近づいていく主人公の目と耳とその身体感覚が捉えた、この夕暮れ時の浜の風光の一スナップだろう。彼の感覚に飛び込んでくるのは、港屋の二階に灯る明かりであり、走り去る汽車の汽笛の音であり、舳を磯の砂に突っ込む船の軋みと衝撃である。彼は赤シャツにあいさつする船宿のおかみをしり目に、やっと船から浜辺へ飛び降りる。この彼の仕草は、まさしく小僧っ子のような彼にふさわしいものだろう。赤シャツと野だいこが言葉の世界に生きているのに対し、主人公の生きているのは言葉のない世界だともいえるだろう。昇給辞退を赤シャツに申し出、《「考えたって同じ事です。さようなら」》と、彼との言葉のやりとりに終止符を打ったエピソードの最後に現れるのも、この発話に続くナレーション（先の引用テクストの省略部分④（…）の、《といいすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている》であり、主人公の視線は人間界を離れ、それと同時にこの「八」章も閉じられることになる。

『坊っちゃん』は、ある意味でこのような少年を思わせる主人公のイメージを、テクストに記憶として封じ込める試みだといえるだろう。作品冒頭の今の自分を嘆くかに見えた彼の読者への語りかけは、少年時代の腕白と悪餓鬼的なエピソードの記憶をたどって下女の清を登場させ、四国への旅立ちを見送る彼女の姿の回想場面に至って、その語り口を小説本来のナレーションに転換する。以後テクストは四国の赴任地での出来事の記憶を、それが現在進行しているかのように、時空の座標軸をその当時に移して展開する。ところが語り手は、この四国での主人公の冒険譚じみたストーリーを語り終えると、再び語りの時点を冒頭の語りと同じく現在に戻して次のように清のことに言及する。

《清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げたまま、清や帰ったよと飛

び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぽたぽたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだといった。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくっても至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますといった。だから清の墓は小日向の養源寺にある。》（一四二頁）

主人公のこのフィナーレの言葉が暗示しているのは、彼の四国での無鉄砲な体験の回想を動機付けたのが、清の死という出来事だという事実だろう。彼女にとって主人公は変わらぬ「坊っちゃん」、すなわち永遠の少年であり、四国で巻き込まれた意想外な出来事も、彼が冒頭に回想する少年時代の無鉄砲の延長線上の出来事である。清とは、彼が子供時代に胸を張った自分の無鉄砲を、大人の今もそのままプラス価値に転ずる転轍機であり、この四国での体験とは自分の守り神としての彼女の発見の記録である。冒頭の無鉄砲さを嘆く彼の口調が、このフィナーレではどこか晴れ晴れとすがすがしい響きを伴ったものに一変しているのは、親譲りの無鉄砲という彼の時間間隔を象徴する墓の中で、この守り神が待ち続けている、その一種の安心感から出てくるものなのだろう。

注

（1）「ある歴史家をめぐる随想」、『三田評論』、一九八四年二月号、二五頁。

（2）「谷崎潤一郎『蘆刈』における語りと時間」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』五十号、二〇一九年三月。

（3）本稿での『坊っちゃん』（明治三九年・一九〇六）の引用テクストには、現代表記による『坊っちゃん』（漱石文学作品集3、一九九〇年、岩波書店）を用いた。以下では便宜上、作品タイトルには『坊っちゃん』を、主人公を示すのに「坊っちゃん」を用いる。なお引用テクストは《　》で囲み、ルビは適宜省略した。

（4）この点については、後年の『道草』（大正四年・一九一五）の「九十八」で描かれる健三の妻との論争での次の言葉が興味深い。《「じゃいって聞かせるがね、己は口にだけ論理を有っている男じゃない。口にある論理は己の手にも足にも、身体全体にあるんだ」》、《「御前が形式張るというのはね。人間の内側はどうでも、外部へ出た所だけを捉まえさえすれば、それでその人間が、すぐ片付けられるものと思っているからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、証拠さえなければ文句を付けられる因縁がないと考えているようなもので……」》、岩波版漱石文学作品集13、二七三―二七四頁。ここで健三が《内側》と言っているのは、今もなお彼の感情の内側に生き続けている少年時の養父島田との過去の記憶のことである。この点並びに『道草』における内的モノローグの問題については拙著『夏目漱石と鈴木大拙――テクスト行為論的考察――』（駿河台出版社、二〇一三年）の第四章「内的モノローグとその表現可能性―『道草』（二）」を参照されたい。『道草』では実際に発話されない内的モノローグにも引用符「　」が付されているが、ここでの内的モノローグは、『坊っちゃん』でのこの手法の深められたものと見ることができる。なお漱石は修善寺での吐血間もなくウイリアム・ジェームズの *A Pluralistic Universe*（『多元的宇宙』）を読み、そこで紹介されているベルクソンを反理知派として、次のようにその学説に共鳴している。《ことに教授が仏蘭西の学者ベルグソンの説を紹介する辺りを、坂に車を転がすような勢で馳け抜けたのは、まだ血液の充分に通いもせぬ余の頭に取って、どの位嬉しかったか分らない。（中略）また教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一巻は昨今ようやく英訳になってゾンネンシャインから出版された。その標題は *A Time and Free Will*（時と自由意思）と名づけてある。著者の立場は無論故教授と同じく反理知派である。》、『思い出す事など』（明治四三年・一九一〇）、岩波版漱石文学作品集14、一三―一四頁。